

大阪市東成区深江で見つかった自然災害伝承碑について

伊藤 廣之*・片山 正彦**・木谷 幹一***

I. はじめに

自然災害伝承碑とは、過去に発生した津波、洪水、火山災害、土砂災害等の自然災害の様相や被害の状況などを記した石碑やモニュメントをさす。自然災害伝承碑は、災害復旧後に被災場所に建立されることが多く、その位置を地図上に表すことで、地域住民の防災意識の向上に役立てられることが期待されている¹⁾。

特定の自然災害伝承碑の先行研究としては、長尾武による安政南海地震後の津波に関する教訓を記した「大地震両河口津浪記」(浪速区幸町3丁目)²⁾、「安政地震津波碑」(天王寺区四天王寺境内)³⁾、「擁護壘」(堺市堺区大浜公園内)などの津波碑の研究⁴⁾がある。長尾武の一連の研究活動は、地域に残る自然災害伝承碑と真摯に向き合い、その研究成果を地域防災での活用につなげようとしたものであり、身近な自然災害伝承碑と向き合うことが地域防災の始発点であることを示唆している。なお最近では、中国の治水神との関連を模索した研究⁵⁾、初等教育現場での活用に関する研究⁶⁾もみられ、大阪ではさまざまな視点や立場での自然災害伝承碑の研究が進められている。

本稿で報告する自然災害伝承碑は、令和2(2020)年の2月に大阪市東成区深江南3丁目の旧幸田恒好家の土蔵内で見つかった石碑2基のうちの「十八年洪水 西歳記念碑」と記された記念碑である⁷⁾。これまで知られている明治18(1885)年の淀川洪水「伊加賀切れ」に関連する記念碑は、水害の復旧事業に当たった政治家を顕彰する意図が強く、また記念碑が水害時の破堤箇所などに建立されるものが大半であった⁸⁾。今回報告する自然災害伝承碑は、「伊加賀切れ」を経験した旧家の戸主が、洪水から30年目にあたる大正3(1914)年に自宅の敷地内に建立したもので、これまでの「伊加賀切れ」の記念碑とは相違する点がみられる。

本稿では、新しく見つかった自然災害伝承碑について、①碑文の概要を明らかにし、その建立の意図を探るとともに、②これまで知られている記念碑との比較をとおして本碑の特徴を明らかにし、自然災害伝承碑としての意義について考えてみたい⁹⁾。

II. 深江地区の概観

大阪市東成区深江地区は、大阪城の南東約3.7kmに位置し(第1図)、東大阪市高井田西地区と接している。江戸時代の深江村は摂津と河内の国境にあり、村の南端を暗越奈良街道、東端を放出街道が通り、村の南東角で2つの街道が交わる交通の要衝であった。慶応4(1868)年の深江村は122戸548人¹⁰⁾、明治9(1876)年1月は140戸(神社1、寺院5を含む)682人¹¹⁾であった。

深江の地は旧大和川と平野川に挟まれた低湿地の一角にあり、「万葉集」に「笠縫の島」と歌われ、「延喜式」の摂津国笠縫氏の居住地とされている。深江の北西に広がる湿地は「五千石沼」¹²⁾とも呼ばれ、宅地化が進む昭和初期までは池や沼が点在し、スゲやハスが自生していた。

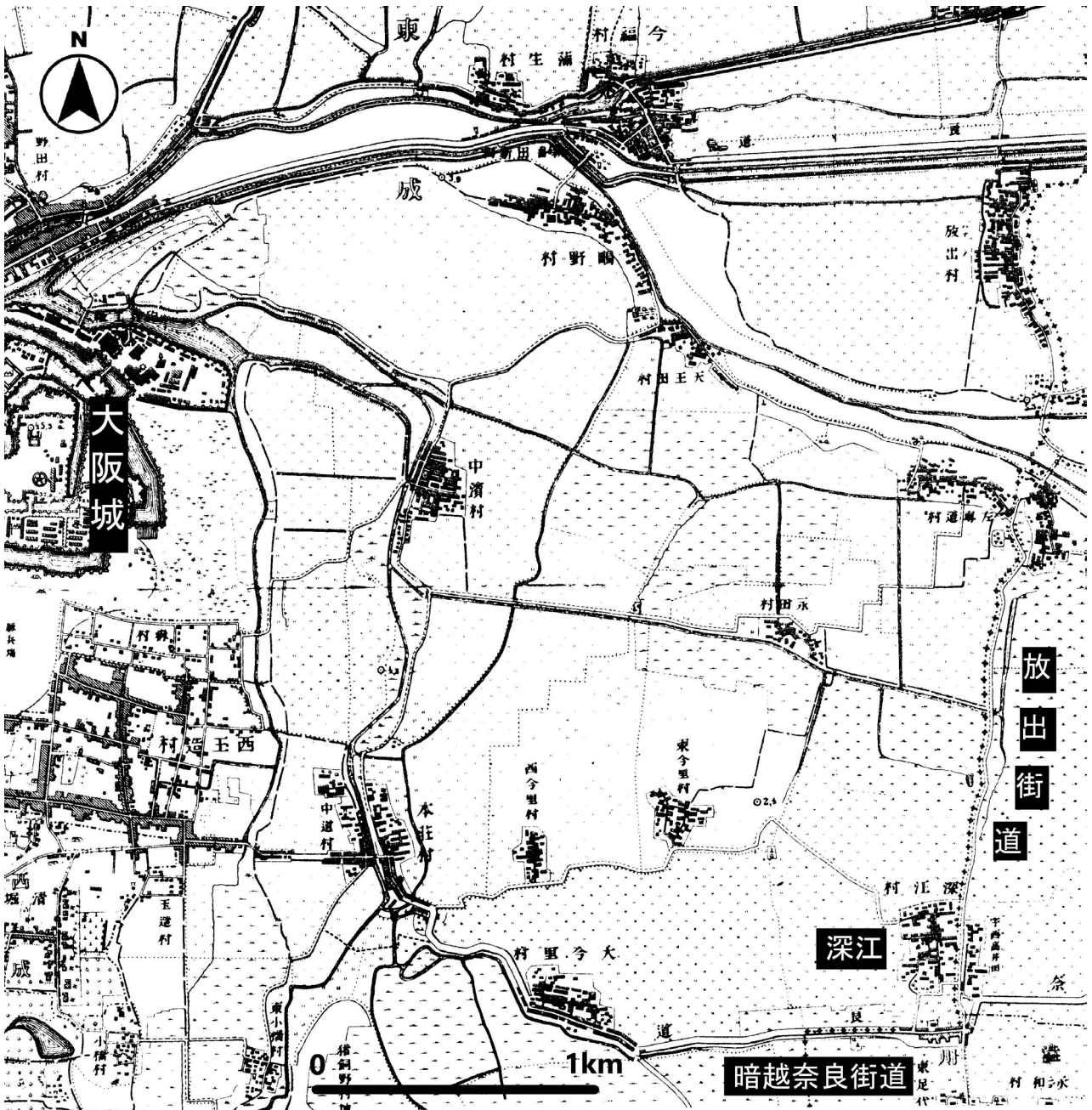
深江の集落は、標高2～3mの微高地に営まれていた。集落の周囲には水路が巡らされ、舟運利用がなされていた。集落の南端を通る暗越奈良街道は、東成区では大半が旧平野川流路の自然堤防を利用しており、深江付近では盛り土をした堤防となっている。この堤防は「五千石堤」¹³⁾とも呼ばれていた。また集落の東端を通る放出街道は、地元では「深江堤」¹⁴⁾とも呼ばれ、「五千石堤」と同様に盛り土をした堤防で、放出付近を流れていた大和川から南へ向かう水路の開削時の土砂を盛って街道堤としたものと考えられる。

深江周辺の低湿地は、宝永元(1704)年の大和川付け替え後もたびたび水害に見舞われた。深江村の江戸時代の記録「稻荷御寄進覚帳」(川田家文書)¹⁵⁾には、享和2(1802)年や文化4(1807)年に大規模な洪水があったことが記されている。また『東成郡誌』によれば、明治

* 元大阪歴史博物館副館長

** 市立枚方宿鍵屋資料館学芸員

*** 大阪市立諏訪小学校教員



第1図 明治18(1885)年頃の深江(『明治前期関西地誌図集成』(柏書房、1989年)所収の明治18年参謀本部陸軍部測量局作成の仮製図「大阪東北部」)に加筆)

18年の「伊加賀切れ」では、深江を含む神路村で民家の鴨居の高さまで浸水したとある。

Ⅲ. 「十八年洪水 西歳記念碑」について

「十八年洪水 西歳記念碑」(以下、「本碑」と表記する)は、高さ約180cmの花崗岩製で、碑の4面に文字が刻まれている(写真1)。本碑の下部には剥離または破損していて判読不能部分がある。判読できた碑文を第2図に示す。以下、碑文の一部を取り上げ、その詳細を

見ていくことにしたい。

まず本碑の建立に関しては、碑文に「大正三寅歳二月十日建之、発起人幸田元三郎七拾壹歳、当代芳治卅八歳謹書也、石工村山芳治」とある。これにより、碑の建立は大正3(1914)年2月10日、発起人は幸田元三郎(71歳)、碑文の謹書は幸田家当主の芳治(38歳)、石工は村山芳治とわかる。幸田元三郎家は川田家などならび江戸時代には庄屋を務めた。幸田芳治の名前は『大阪府市名譽職大鑑』(1935年)に記載がある。それによれば、幸田芳治は明治10(1877)年11月生まれで、村の助役、



写真1 十八年洪水 西歳紀念碑 全景と部分 (2020年3月23日撮影)

村会議員、村長等を歴任し、大阪府今里方面常務委員等も務めた¹⁶⁾。幸田芳治は幸田元三郎の長男と考えられる。

つぎに本碑の上部に注目すると、片面には横書きで「十八年洪水」、その裏面には「西歳紀念碑」とある。明治18(1885)年は「西歳」にあたる。詳しくは後述するが、上記の碑文の内容を踏まえると、この碑は、明治18年の淀川洪水から30年目にあたる大正3年に幸田元三郎が建立した記念碑と考えられる。

当時の水害の状況や避難のようす、その後の対応などは、どのようになっていたのだろうか。まず「十八年洪水」の碑面2行目から3行目に、「明治十八年六月三十日洪水撰河ニ氾濫セシ [] (破損) 蓋シ濁流滔々、我カ深江村モ亦厄ヲ免ル、能ハザリキ」とある。明治18年6月30日に撰津・河内が浸水し、深江村もその被害を免れなかったと記されている。

明治18年の淀川洪水は、通称「伊加賀切れ」と呼ばれ、河内平野に大きな被害をもたらした。6月18日午前3時、枚方の三矢村・伊加賀村(現大阪府枚方市)の淀川堤防が決壊し、その切れ口は百間余にも広がった。洪水はたちまちの間に茨田郡一面を水没させ、讃良・交野・東成郡の一部から大阪市中におよんだ(第1回目の水害)。東成郡野田村網島(現大阪市都島区)の淀川堤

防を切り開いて、ようやく退水の気配が見えはじめた6月28日、再び豪雨となり、7月になると、伊加賀堤防の切れ所が元の100間余に広がり、洪水がとうとうと流入したという(第2回目の水害)¹⁷⁾

この点から見ると、深江の人びとにとって、第1回目の6月17日以降の水害よりも、第2回目の水害、すなわち寝屋川の南岸の徳庵堤を越水し、深江地区だけでなく東成区や東大阪市の広範囲にまで及んだことが、より重要な出来事と捉えられたのだろう。

つぎに洪水直後のようすに関する部分である。「西歳紀念碑」の碑面1行目から2行目にかけて、「村民ハ大阪市上本町ノ寺院ニ収容救助、亦旧煉兵場デモ小屋掛ニテ休養、殆ンド一ヶ月余帰村後、居宅無キ人ハ薬蓮寺境内川田久兵衛門前ニテ仮住ス、皆々仕事ナク桜之宮堤防普請ニ勤ク」と記されている。深江の村民は、大阪市の上本町の寺院に収容・救助され、また旧練兵場(大阪城のすぐ東に隣接した旧陸軍の「城東練兵場」のことか)でも小屋にて休養した。洪水から1ヶ月ほど後に帰村したが、家を失った人びとは薬蓮寺の境内や川田久兵衛宅の門前において仮住まいする状況であった。

ここで薬蓮寺や川田久兵衛宅の位置関係について確認しておきたい。深江地区の個人蔵の絵図に、明治18(1885)年の洪水前後の深江集落のようすを描いたものがある(写真2)。これは明治2(1869)年生まれの角谷巳之助氏が、昭和18(1943)年9月15日に当時の記憶をてがかりに作成したもので、道路・水路・池・橋・菅田・神社・寺院・地藏堂・住宅・門などが描かれている。この絵図によれば、薬蓮寺は水路が取り巻く深江集落の北西角にあり、川田久兵衛宅は薬蓮寺から1軒の民家を挟んだ東に位置していた。川田久兵衛宅の「門前」が、仮住まいの場所になっていたのである。

薬蓮寺については、『東成郡誌』に記載がある。それによれば、「面積一畝十一歩、今耕地となる。日蓮宗本能寺同本興寺両末。正徳六年僧日成創建。明治十八年の大洪水に堂宇流亡し、其後幾も無く大阪市上本町八町目に移転せり」¹⁸⁾とある。薬蓮寺は明治18年の洪水に際して堂宇が流失したが、その境内は深江村民の一時的な仮住まいの場になっていたことが本碑よりわかる。

ちなみに江戸時代の記録「稲荷御寄進覚帳」¹⁹⁾(個人蔵)には、明治18年の淀川洪水「伊加賀切れ」とよく比較される、享和2(1802)年の「点野切れ」のときの深江のようすが記されている。「去程ニ村内之銘々法明

<h3 style="text-align: center;">水洪年八十</h3> <p>安二居テ危ヲ忘レサルハ長ク安ヲ保ツノ道ナリ富ニ處テ貧ヲ忘レルハ タル所以ナリ願ミレハ明治十八年六月三十日洪水撰河ニ氾濫セシ 盪シ濁流滔々我カ深江村モ亦其厄ヲ免ル、能ハザリキ當時水俄ニ ヲ以テ免レ皆ハ財取ムルニ違ナク炊爨途絶工村民多クハ大阪城外ニ 人ハ玉造森治郎兵衛氏ニ寄ル余ハ留テ屋上ニ栖メリ而シニ水去リ 埋メ耕牧固ヨリ難シク親戚ノ贈遺ヲ仰キ僅ニ一家口ヲ糊スルノミ 治メ累歳借据漸ク耕稼スルヲ得爾來三十年漸ク舊面目ニ復スルニ ベカラザルナリ今ヤ能富メリト云フニアラザレトモ亦朝夕ノ安ヲモ保 日ノ安ニ慣レテ昔時ノ危ヲ忘レ遂ニ奢修ノ風ニ染マンコトヲ恐ル古訓 忠孝勤儉ニ因テ之ヲ成立セザルナク子孫ノ頑率奢傲ニ因テ之ヲ覆墜 立ツ難キ天ニ舛ルカ如ク覆墜ノ易キ毛ヲ燎クカ如シト嗚呼天災時變ノ 其恐ルヘキモノ獨リ天災時變ノミアラサルナリ爾等ノ深ク以テ誠トナサンコト</p> <p>ヲ欲シ石ニ勒シテ以テ後昆ニ示ス 奢は家を亡ほし 儉約は家を潤ほす 厚味は身を 害し飢食は長寿を保つ 朝起と木綿着ものと妻めしはいのちもながく家も繁昌善きこ とふてまめにせよ悪しきもせめぬ誠の人の道になる 母つな七十八歳余ハ四十二歳妻 サタ三十八歳二女シメ十七歳四女チサハ八歳三女キサ十四歳別所村西口氏工養子ニ行キタリ</p>	<h3 style="text-align: center;">西歲紀念碑</h3> <p>于時村民ハ大阪市上本町ノ寺院ニ收容救助亦旧煉兵場テモ小屋掛ニテ休養殆んど 一ヶ月余帰村後居宅無キ人ハ葉蓮寺境内川田久兵衛門前ニテ仮住ス皆々仕事ナク 桜之宮堤防普請ニ働ク余獨リ保護ノ為メニ階ニ止マル誰カ居ルカト巡查船ニ乘リ テ握飯梅干積物等ヲ竹ノ皮包ミテ貫ヒ食ス奈良街道ノ上淀川蒸氣船力通ヒ本宅ノ 庇工横附ケ其処テ自由ニ乘降門ノ高倉敷地ハ其ノ用意ノ水盛ナリ租税ハ当大字デハ 石川氏ト二軒ノミ納税高二分ノ一ヲ課セラル字下嶋自作地ニクワイト稗ヲ作り其 実ノ粉テ団子ニシテ食ス 翌年ノ初種ハ全部府ヨリ貰ウ竹屋町豊田氏ハ瓦屋橋之濱 ヲリ船ニ乘リ船頭ト共ニ陣笠ヲカフリ佐々木及ヒ宅ノ見舞ヲ受ケタリ口口度々口口トモ 雑魚蠟燭等種々貫ヒ受ケル西口氏家族及ヒ出入衆モ豊田氏ニテ助ケラル幸ヒ南借家空 キタリはまの兄浅吉拾九歳別家佐七卅二歳九ノ助橋寅吉船ヲ買ヒ四斗樽ニ水口口口尋ネ受ケル 当日十二時頃俄力ニ増水台所ノ北高キ間ヨリ再ヒ台所工戻ル暇ナ 筒引出シ三ツ半異倉ハ米麦三俵通リツカル濡レタル米麦菜種豆等ハ森氏ノツル 庭ノ土堀ハ皆倒レル幸ヒ船ニテ法明寺本堂東ケラバノ下ヲクベリニ階工渡リ一夜</p> <p>ノ救助船ニテ村民ト玉造安堂寺橋筋ノ坂ニテ降り各々ノ親族ヘ行ク家内衆ハ直子ニ森 日間余救養ヲ受ク北風ニテ筆筒家ノ倒レ木等村ノ北及空地ニ流レ止マリ処々ニ材木 水八庭ノ地上ヨリ金尺ニテ八尺七寸今ノ高倉敷地ニ尺五寸ヒクシ仕事部屋ノ二階ヨリ五寸上ル口口洪水紀念 碑アリ○大正三寅歲二月十日建之發起人幸田元三郎七拾壹歳當代芳治卅八歳謹書也石工村山芳治口口歲口天</p>
---	--

第2図 十八年洪水 西歲紀念碑 碑文（□および [] は剥離・破損による判読不能箇所を示す。）

寺・真行寺・葉蓮寺并ニ小兵衛・吉兵衛・安兵衛、右六ヶ所村中ニ而至而地面高く在之候ニ付、右之所へ寄集り銘々之内へいかたを拵らへて乗りて見舞に帰ル、然レ共喰物を銘々案し居る、其夜ハ村中之者共右六ヶ所又ハ新田高ク所口并ニ新家之高キ人家へ馳集り夜明ス」とある。つまり葉蓮寺や法明寺・真行寺、小兵衛・吉兵衛・安兵衛の居宅6ヶ所は深江村の中でも地面の高いところにあり、村人が集まっていた。しかしながら、その後「翌三日次第へ」に水重増り未ノ刻比重丈也、其時法明寺・真行寺・葉蓮寺の本堂并ニ吉兵衛居宅・安兵衛居宅、右四ヶ所者重丈床より四五寸下ニ而御座候、就中小兵衛者内底の沓ぬぎ迄が重丈之水也、左候へ者村内高キ所の

中ニ法明寺本堂・真行寺本堂・小兵衛の床、右三ヶ所床迄ハ壹尺余もあいだ有之、然ルニ葉蓮寺の台所床より六七寸上エ迄湛へ」とあり、これらの寺院や居宅は翌日には浸水したようで、葉蓮寺にいたっては台所の床上「六七寸」（約20cm）まで浸水したらしい。

さて、本碑には「余獨リ保護ノ為メニ階ニ止ル、誰カ居ルカト巡查船ニ乘リテ握飯・梅干・積物等ヲ竹ノ皮包ミテ貫ヒ食ス」とある。「余」とは碑の發起人の幸田元三郎であろう。元三郎は被災者保護のため、流失を免れた自宅の2階に1人で残った。付近を通りかかった巡視船に乗った際には、竹の皮に包まれた握り飯や梅干、漬物などをもらって食べたとある。

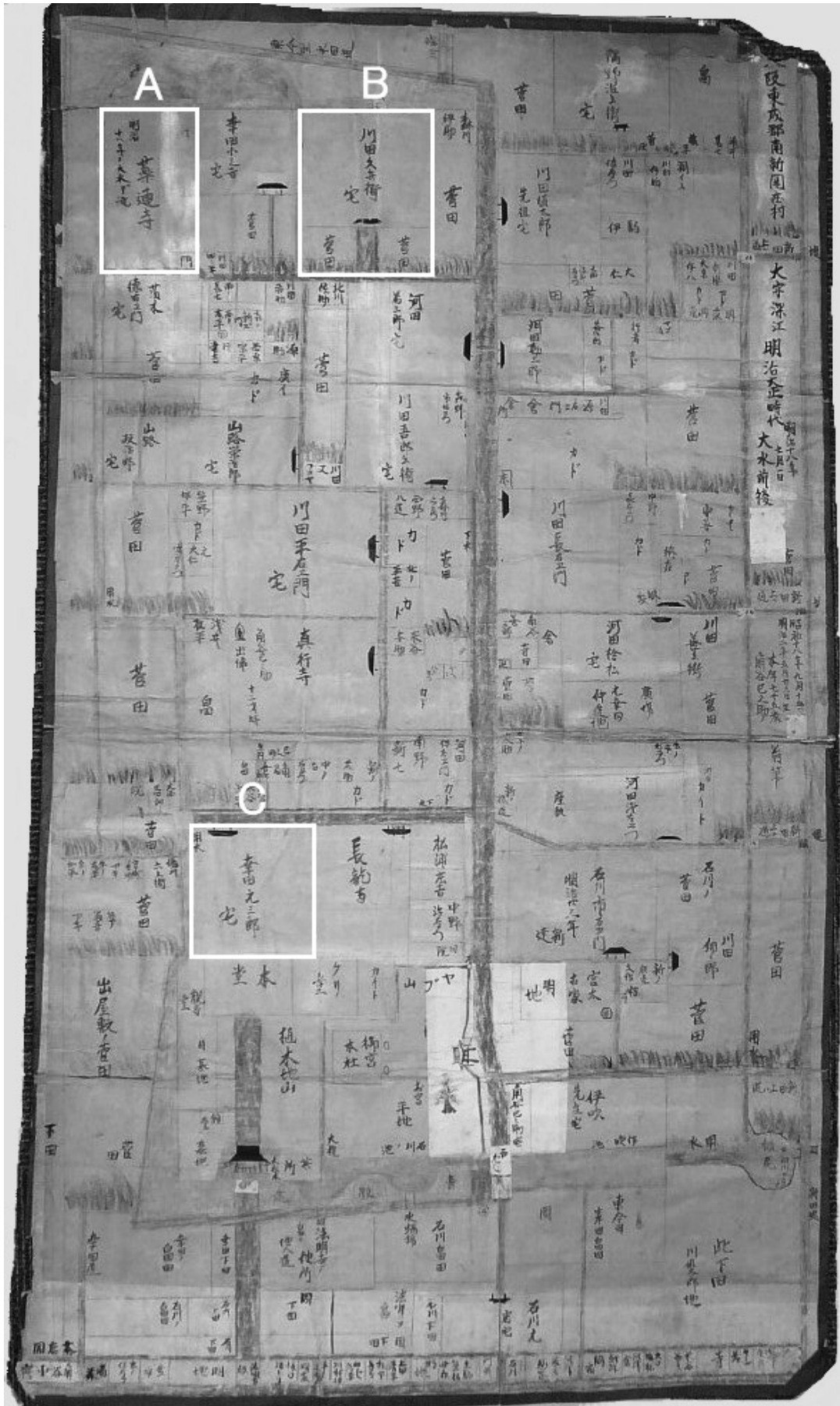


写真2 明治18年深江村絵図(個人蔵) 縦約104cm、横約61cm、図のAは葉蓮寺、Bは川田久兵衛宅、Cは幸田元三郎宅を示す。

洪水によって深江の人びとは、普段の仕事を失うことになった。本碑には「桜之宮堤防普請ニ働ク」とある。桜之宮堤防の普請とは何をさすのであろうか。『東大阪市史 近代Ⅰ』によれば、大阪市に流入している支川寝屋川堤防（通称「徳庵堤」）にも水勢が迫り、全堤防が破壊の危機にさらされたことから、この流入した水を本川に戻すため、東成郡野田村（現・都島区網島）の堤防を切開して淀川に放流した²⁰。これが「わざと切り」呼ばれるもので、桜之宮堤防の普請とは、切り開いた桜之宮堤防などの復旧工事をさすものであろう。堤防の復旧のために多くの人手が必要となり、深江の人びとも桜之宮堤防の復旧の仕事に携わったのである。

最後に、本碑の建立目的について考えてみたい。その手がかりとなるのは、つぎの碑文である。「累歳倍倨漸ク耕稼スルヲ得、爾来三十年漸ク舊面目ニ復スルニ」とある。「伊加賀切れ」から30年目になって、ようやく以前のよう「面目」に復することができたと記されている。この点から推察すると、本碑は「伊加賀切れ」から、ようやく元の生活を取り戻したことを顧みて建立したものであり、その根底には水害からの復興の営みを教訓として後世に伝えたいとする熱い思いが込められているといえる。

IV. 自然災害伝承碑としての位置づけ

「伊加賀切れ」に関する石碑やモニュメントは大阪府と京都府で現在43箇所確認されている。そのうち淀川改修に関与した歴代の知事や大橋房太郎などの政治家に対する個人顕彰、またはそれを示唆する碑が12箇所と最も多くを占める。それに次いで橋に関する碑が10箇所、寺社や地蔵等の由緒に関するものや案内板が8箇所と続く（第1表）。しかしながら、本碑のように地域の被害記録、被災者の避難行動、さらに地域住民の生活や復旧まで、建前でなく真実を伝承する碑は見当たらない。その意味では、本碑は大阪市浪速区幸町の「大地震両川口津浪記」²¹と特徴が似ていて、非常に貴重な地域の遺産といえる。

つぎに地域性を見てみたい。大阪市内に建立されているものは34箇所と非常に多い。そのうち本碑の建立されている東成区は4箇所、北区の12箇所、城東区の5箇所について多い。とくに大今里の前八剱神社の大楠には、2回目の6月30日以降の水害時に住民40数名が大

楠の大枝で3日間避難して、助かったことが伝承されている。また東成区に隣接する城東区中浜には南中浜子安地蔵尊があるが、これは大阪城内の蓮如上人説法の松あたりにあった地蔵が流れ着いたと伝承されている。これも第2回目の水害時に発生した高潮によって運ばれてきたものである。

また本碑を中心に半径500m以内には、大今里の前八剱神社、深江南の旧幸田家東隣の長龍寺や島光大神劔大神、東大阪市足代新町の布施戎神社と5箇所の伝承碑が確認されている。まさに深江地区周辺は、第2回目の「伊加賀切れ」の激甚被害地の一つであったといえる。そのために本碑の碑文の伝える内容は、地域防災、準広域防災の立場でも、永く継承していかなくてはならないと考える。

V. まとめ

以上の検討結果をまとめると、以下のとおりである。

1) 「十八年洪水 西歳記念碑」は、明治18(1885)年の「伊加賀切れ」から30年目にあたる大正3(1914)年の2月10日に、深江で「伊加賀切れ」を経験した幸田元三郎が、当時の水害の状況、避難のようす、その後の対応などを振り返り、それを教訓として後世に伝えるために屋敷地内に建立したものである。

2) 従来知られている明治18年の「伊加賀切れ」に関連する記念碑は、その建立の意図が水害の復旧にあたった政治家の顕彰にあり、建立地が水害時の破堤箇所であった。これに対して、本碑は被災した村の旧家の戸主が建立者であり、後世の人びとに過去の記憶と教訓を伝えることが建立の目的だった。そうした点から、「十八年洪水 西歳記念碑」は従来の碑と比べ、明らかに性格の異なるものであったといえる。

なお最後に、本碑が公の場で公開されるようになったことは、子どもを含めたより多くの人びとが深江の歴史や過去の自然災害を学ぶうえで貴重である。今後、本碑が地域の防災学習や学校教育などにおいて、さまざまに活用されることを期待したい。

付記

資料調査にあたっては、一般社団法人深江郷土資料館理事長・石川健二氏、同館理事・山元啓三氏、角谷征一氏、川田勝造氏、綜芸舎・藪田夏秋氏、同・藪田千秋氏、

第1表 明治18(1885)年「伊賀切れ」関連石碑等の概要

名称(通称)	碑陽	碑陰	石碑設置場所	碑文日	碑建立発起人	材質:石工	建碑式	篆額	撰文
1 明治十八年洪水碑	明治十八年洪水碑	澁川洪水碑銘と碑文	枚方市桜町9(移設)	明治19年9月	菊田保太郎ほか	緑池片岩:大阪松原嘉兵衛	明治19年11月7日		菊池純
2 修堤碑	篆額と碑文	発起者11名	高槻市唐崎南3 淀川右岸堤防(移設)	明治19年7月	嘉来推達ほか	緑池片岩	明治19年10月31日	建野郷三	土屋弘
3 赤井堤紀念碑	篆額と碑文	発起人150名	寝屋川市木屋元町9	明治19年7月	西尾八郎次	緑池片岩:大阪坂田友七		建野郷三	西尾徳太郎
4 澁川洪水紀念碑	篆額と碑文	発起人15名	東大阪市都島区中津町1 桜宮神社	明治19年3月	秋岡義一・寛平兵衛ほか	緑池片岩	明治19年10月24日	建野郷三	菊池純
5 (淀川大洪水紀念碑)	碑文	幹旋人15名	東大阪市鴻池地蔵庵町9	明治19年7月	浦橋剛建立幹旋人	花崗岩	明治20年9月24日		浦橋剛
6 藤田社功碑	碑文	建立時期ほか	和泉市上市2 大和川堤防	明治19年8月	浦橋剛建立高森弥一郎幹旋	花崗岩:浪華小西久富			浦橋剛
7 重修桜堤碑	篆額と碑文	碑文	東大阪市鴻池元町2 鴻池家私有地内	明治19年3月	鴻池善次郎幸方	砂岩	明治19年5月カ	建野郷三	土居通夫
8 洪水標示石	篆額と碑文		大阪市北区天満1-22 箱倉内	明治19年3月	中谷慈恭カ	頁岩:大阪松原嘉兵衛	明治20年カ	三条実美	五十川佐武郎
9 洪水標示石	浸水量		大阪市北区天満1-23 中門		造幣局	花崗岩			
10 洪水標示石	浸水量		大阪市北区天満橋1-2 箱倉内(移設)		造幣局	花崗岩			
11 洪水標示石	浸水量		大阪市北区天満1-22 4号門内		造幣局	花崗岩			
12 洪水標示石	浸水線		大阪市都島区細島町カ		不明	不明			西村捨三
13 和佐登幾利	不明	不明	大阪市都島区南野2-18 四條曙神社(移設)	明治24年6月	寛平兵衛・秋岡義一			山田信道	牛谷彌
14 六郷修堤碑	篆額と碑文	発起人	大阪市鶴見区放出東1-23 正四寺(移設)	明治27年4月	牛谷彌ほか	花崗岩		高崎親章	藤沢南岳
15 淀川改修紀功碑	淀川改修紀功碑と碑文	碑文	大阪市都島区長柄東3-3 毛馬排水機場	明治42年6月	高崎親章	花崗岩	明治42年6月1日		十三思昔會
16 往來安全灯	東 往來安全	碑文と発起人ほか	大阪市北区中津4 十三大橋南詰	大正9年3月	十三橋南詰町親友会	花崗岩			
17 紀念碑	紀念碑と明治天皇御製	碑文と発起人	大阪市北区中津2 富島神社	大正9年10月	十三思昔會	頁岩			
18 大橋彦太郎君紀功碑	大橋彦太郎君紀功碑等	碑文	四條曙南野2-18 四條曙神社(移設)	大正12年6月	大阪官民有志	花崗岩	大正12年6月カ		井上孝哉
19 記念碑	篆額と碑文	総代人議員ほか	大阪市北区長柄東3-3 毛馬排水機場	大正14年10月	淀川左岸水害予防組合	花崗岩:浪連元町二石金	大正14年10月24日	加藤高明	中川望
20 水防碑	水防碑と名言	碑文	大阪市都島区細島町10 大川河川敷	昭和55年	大阪市	花崗岩			
21 川崎橋	川崎橋命名の由来と碑文		大阪市北区天満1 川崎橋西詰	昭和53年	大阪市	ハンレイ岩/安山岩			
22 梓樞木橋	碑文等		大阪市中央区北浜2-1	昭和60年	大阪市	ハンレイ岩			
23 安治川橋之碑	安治川橋之碑と碑文等		大阪市西区川口2-4	平成3年3月	大阪市	人工物			
24 天満橋 橋名飾板	碑文等		大阪市北区天満1 桜之宮公園	昭和62年5月	大阪市	人工物			
25 天神橋 橋名飾板	碑文等		大阪市北区菅原町1	昭和62年5月	大阪市	人工物			
26 天神橋歴碑	天神橋歴碑と碑文		大阪市中央区北浜東6	昭和62年5月	大阪市	ハンレイ岩			
27 渡辺橋・肥後橋	碑文等		大阪市北区中之島2-3	平成5年9月	大阪市	人工物			
28 十三大橋	碑文等		大阪市淀川区新北野1-4	平成9年	大阪市	花崗岩			
29 木津川橋	碑文等		大阪市西区江之子島1-9	平成10年	大阪市	人工物			
30 松島橋	碑文		大阪市西区千代崎1-1	平成11年4月	大阪市	人工物			
31 沖向地蔵尊由来	説明文		大阪市北区天神橋筋6		天六東通り商店会	金属製			川島長利
32 寺小屋 中浜青葙尊 旧跡	寺小屋 中浜青葙尊 旧跡	碑文ほか	大阪市城東区中浜2 正圓寺門前	平成6年12月	正圓寺	花崗岩			
33 由緒之碑	由緒之碑 大坂冬之陣ほか	碑文	大阪市城東区中浜4 若宮八幡大神宮	平成27年	若宮八幡宮前宮司 森弥生	花崗岩			
34 野江水流地蔵尊	説明文		大阪市城東区野江4 野江水流地蔵尊	平成29年3月	城東区役所	金属製			
35 諏訪神社と獅子舞	説明文		大阪市城東区諏訪1 諏訪神社前	平成27年3月	城東区役所	金属製			
36 南中浜子安地蔵尊の由来	説明文		大阪市城東区中浜3 平野川堤防	平成11年8月	宮田進・利藤正二・日西茂	金属製			
37 前八瀬神社略記	神社の由緒	建立者	大阪市東成区大今里1-17	昭和52年7月	氏子総代一同ほか	花崗岩			
38 島光大神御大神のいわれ	神社の由緒		大阪市東成区深江南3	平成23年11月	山崎ヒサ親族	金属製			
39 十八年洪水 西蔵紀念碑	十八年洪水と碑文	西蔵紀念碑と碑文	大阪市東成区深江南3 深江郷土資料館(移設)	大正3年2月	幸田元三郎	花崗岩:村山芳治			幸田芳治
40 長龍寺	説明文		大阪市東成区深江南3		長龍寺	柳脂製			
41 布施戎神社の歴史	神社の由緒		東大阪市足代1	平成9年2月	布施戎神社	金属製			
42 小野平右衛門家案内板	説明文		枚方市新町1-6	平成3年8月	宿場町枚方を考える会	木製			
43 勝山翁顕彰碑	碑文		京都市伏見区水垂 水垂墓(移設)			片麻岩			

「記念碑等の概要」(水谷幹一「大阪府における明治18年「伊賀切れ」に関する記念碑について—小学校教育での活用を模索して—」『京都歴史災害研究』20、2019、44頁)を加筆修正。

作成:水谷幹一

大阪歴史博物館学芸員・島崎未央氏、大阪市教育委員会事務局顧問・金谷一郎氏、同局文化財保護課・櫻井久之氏、奈良文化財研究所・上相英之氏にご協力を得ました。記して感謝を申し上げます。

本稿執筆中の2020年11月12日、本碑は国土地理院の自然災害伝承碑に登録された。

注

- 1) 国土地理院「自然災害伝承碑について」<https://www.gsi.go.jp/common/000211407.pdf>による(2020年9月6日閲覧)。
- 2) 例えば長尾武『水都大坂を襲った津波—石碑は次の南海地震津波を警告している。—』私家版、2006年、のち改訂版、2012年。長尾武『『大地震両川口津浪記』にみる大阪の津波とその教訓』京都歴史災害研究13、2012、17～26頁。長尾武「大阪市における南海地震石碑と教訓の継承」歴史都市防災論文集8、2014、263～270頁。
- 3) 長尾武「大阪・四天王寺、安政南海地震津波碑文の判読」歴史地震27、2012、77～84頁。
- 4) 長尾武「堺市・『擁護壘』、神から賜った壘」歴史地震24、2009、91～100頁。
- 5) 大脇良夫・植村善博編著『治水神禹王をたずねる旅』、人文書院、2013、206頁。植村善博+治水神・禹王研究会『禹王と治水の地域史』、古今書院、2019、154頁。
- 6) 木谷幹一「大阪府における明治18年『伊加賀切れ』に関する記念碑について—小学校教育での活用を模索して—」京都歴史災害研究20、2019、43～51頁。
- 7) 旧幸田恒好家の建物の改修工事にあたり、屋敷地南東角の土蔵内に2基の石碑が確認された。屋敷地所有者から調査依頼を受けた伊藤が、2020年2月24日に土蔵内の石碑を実見し、そのうちの1基が明治18年の淀川洪水に関する記念碑であることを確認した。同年3月、石碑2基は東側の隣地に移設され、4月16日に綜芸舎によって採拓がおこなわれた。なお土蔵の床板の状態から、この2基以外にも石碑があったと推測されるが、その行方については確認できていない。
- 8) たとえば、枚方市伊加賀の決壊箇所付近に建立された「明治十八年洪水碑」や、高槻市唐崎に建立された「修堤碑」、大阪市都島区の桜宮神社に建立された「澱河洪水記念碑銘」は、当時大阪府知事であった建野郷三を顕彰したものである。また、四條畷市の四條畷神社に建立された「大橋房太郎君紀功碑」「治水翁碑」は、大阪府議会議員も務めた大橋房太郎を顕彰したものである。詳しくは、片山正彦「淀川の近代治水事業と禹王遺跡」地理63(11)、2018、32～37頁。
- 9) 深江で見つかったもう1基の石碑については、片山正彦「大阪市東成区で見つかった災害の記憶」(『大阪春秋』181、新風書房、2021年1月)で概要を紹介している。
- 10) 大阪府東成郡編『東成郡誌』、大阪府東成郡、1922、670頁。
- 11) 平凡社地方資料センター編『日本歴史地名大系 第28巻大阪府の地名I』、平凡社、1986、638頁。
- 12) 大阪府編纂『洪水志』2、大阪府、1887、87頁。東京大学経済学部図書館所蔵本
http://ut-elib.sakura.ne.jp/digitalarchive_02/semi-rare_w/5505809227.pdfによる(2020年11月22日閲覧)。
- 13) 大阪府東成郡編『東成郡誌』、大阪府東成郡、1922、659～674頁。
- 14) 森田弘『子どものための深江の誇り』、私家版、1974、10頁。
- 15) 「稲荷御寄進覚帳」(川田家文書)は、宝暦14(1764)年の深江村民による氏神の社殿修復の記録帳であるが、大塩平八郎の乱や異国船の来航など、宝暦期から幕末までの出来事や災害についても書き留められている。
- 16) 自治名誉職協会編『大阪府市名誉職大鑑』2、自治名誉職協会、1935、562頁。
- 17) 枚方市史編纂委員会編『枚方市史』4、枚方市、1985、181頁。
- 18) 大阪府東成郡編『東成郡誌』、大阪府東成郡、1922、717頁。
- 19) 注15)に同じ。
- 20) 東大阪市史編纂委員会編『東大阪市史 近代I』、東大阪市、1973、888～910頁。
- 21) 長尾武『『大地震両川口津浪記』にみる大阪の津波とその教訓』京都歴史災害研究13、2012、17～26頁。